

日本植民地文化運動資料 5

ぶんけんほうこく

解題 藤田豊(東京電機大学名誉教授)

【復刻版】

文

獻

報

國

朝鮮總督府図書館編

全一二巻 別冊一

戦前日本最大の図書館報で、

近代日本の図書館史に不可欠の資料。

總督府の文化政策・皇民化政策がわかり、

植民地期朝鮮の研究にも欠かせぬ雑誌。

緑蔭書房



●本誌をおすすめしたい研究者●
 日本図書館史・日本植民地図書館史・韓国近代図書館史・日本近代史・東洋史・書誌学・出版文化史・皇民化等々の研究者。

『日本植民地文化運動資料』刊行にあたって

近年、日本植民地の研究は質量とも大きな発展を遂げつつあるが、まだまだ政治・経済的側面への偏重は否めない。より構造的に浮き彫りにするために文化史的な視点からの分析が必要である。本資料集の刊行は植民地研究の上で、これまで不十分であった文化運動関係の資料を提供しようとするものである。

本資料集が対象とする地域は、戦前・戦時中、日本が植民地としていた地域及び占領地域である。即ち台湾、朝鮮、満洲、樺太を中心に中国(満洲を除く)、フィリピン、ベトナム、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシアそれに南洋諸島等の所謂「大東亜共栄圏」とほぼ重なる地域を対象とする。

また対象とする分野は官民・民族を問わず広く知的・精神的・思想的運動を含む。例えば新聞・雑誌・放送・映画・図書館等の諸メディアから教育、文芸、言語、都市計画・建築、社会・生活改造等である。

本資料集は、最初に日本植民地下でどのような集積がなされていたのか、それが最もよくわかる図書館資料を刊行し、随時他の分野の資料も公刊していく予定である。

『文獻報國』復刻にあたって

朝鮮総督府図書館報『文獻報國』は、朝鮮の施政二五周年・開館一〇周年を記念して一九三五(昭和一〇)年一〇月創刊され、一九四四(昭和一九)年二月まで通巻一〇二号が刊行された。図書館は館報創刊一〇年前、一九三三(大正二二)年一月、斎藤総督の所謂「文化統治」施策の一環として、朝鮮における図書館活動、文化・教育活動の推進機関として設立された(館長は四五年まで荻山秀雄)。

戦前の総督府図書館は日本の植民地最大の図書館であったばかりでなく、「内地」の大阪府立図書館と共に予算、職員数、蔵書等、当時の日本において群を抜いた存在であった。しかし戦後の日本図書館界においては、少なからず旧植民地図書館人が指導的地位を占めるなど、人の面では少しも絶えることがなかったが、それと対照的に図書館としての存在は忘れられ、その活動を記録した『文獻報國』も埋もれたままであった。当然あるべき日本近代図書館史の記述からは旧植民地図書館(活動)の歴史は抜け落ちていく。皮肉にも日本の植民地であった韓国では、近代図書館史研究の歴史的資料として『文獻報國』は利用されている(国立中央図書館史「一九七三年」は朝鮮総督府図書館について大部の頁を割いている)。今度は我々の手で日本近代図書館史の空白を埋める作業をやらねばならない。『文獻報國』は誌名の通り国策雑誌としての性格と内容が濃い。一般の本の収集・保存、図書館の

『日本植民地文化運動資料』関係年譜

- 明治39年 南満洲鉄道株式会社創立
- 明治40年 満鉄調査部に図書室設置(後の大連図書館)
- 明治43年 韓国併合
- 奉天、長春など八ヶ所に図書館閲覧場設置
- 大正3年 第一次世界大戦勃発
- 大正4年 列車文庫設置
- 大正5年 南満洲司書会成立「南満洲司書会雑誌」創刊
- 大正7年 大連図書館創立
- 大正8年 朝鮮三一運動
- 大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称
- 大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任
- 大正12年 哈爾濱図書館設立
- 大正14年 「書香」創刊
- 大正15年 柿沼介、大連図書館長に就任
- 昭和3年 張作霖爆殺
- 昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始
- 昭和6年 「書香」復刊→19年休刊
- 満洲事変
- 昭和7年 前線兵士への陣中文庫開始
- 満洲国建国
- 昭和10年 「全滿24図書館共通滿洲関係漢書件名目録」刊行
- 昭和10年 朝鮮総督府図書館報「文獻報國」創刊→19年廃刊
- 昭和11年 奉天図書館「収書月報」創刊→18年休刊
- 昭和12年 日中戦争始まる(7月)
- 満鉄附属地の行政権を満洲国に移譲
- 「図書館新報・第一次」創刊、17号より「満洲読書新報」と改題
- 昭和13年 新制図書館研究会第一回委員会開催
- 昭和14年 大調査部体制となる
- 哈爾濱図書館「北窓」創刊→19年休刊
- 昭和16年 満洲国図書館協会発足
- 昭和17年 満鉄調査部事件
- 昭和20年 日本敗戦

普及といった図書館業務のほか、朝鮮統治の理念と思想善導と産業振興のための図書の収集と奉仕」という総督府の施策の担い手としても大いに期待されていた。とくに非識字層の解消、日本語の普及、日本語を通じた文化一般の普及、内外地融和一体の強化、内鮮一体化から「皇国臣民の錬成」、創氏改名、まで、戦局の推移・拡大に伴ない民衆教化を通じた同化政策・皇民化政策の推進機関としての比重を増していった。植民地下の図書館がいかに戦争体制に組み込まれ、いかに教化機関化していくか、その動態を知る貴重な資料である。

更に本誌の資料的価値は、量的にも質的にも豊富な書誌・目録類と館内業務資料にある。主なものをあげると、「鮮内発禁図書雑誌」は出版取締・思想統制の貴重な資料、「警務局納本目録」は朝鮮で公に刊行された図書の全リストを毎月掲載した唯一の資料で、朝鮮における出版史研究には不可欠。「公開館員研究発表」は朝鮮を中心とした書誌・版本等に関する論文で、今日でもその資料的価値は高い。「新着増加図書分類目録」「本館特別図書紹介」「本館備置雑誌新聞目録」「新刊書評」は、所蔵本の内容や貴重図書の紹介にとどまらず、現在の韓国の国立中央図書館に継承された旧総督府図書館所蔵本の手引書としての利用度も高い。「鮮満関係重要雑誌記事目録」(毎月掲載)は類似目録が少ない貴重なもので、朝鮮、中国(満洲)、蒙古の政治・経済・社会・文学等の各分野に関する記事総件数七二二〇、日本語・朝鮮語の雑誌三七〇誌を所収しており、日本で見えることもできない雑誌も多くその内容を知る貴重な資料である。本誌のもう一つの特徴は館内の業務資料にある。詳細な日常業務と現場の図書館員の発言・感想の記事からは、図書館活動への熱意や時局に対応した個人の意識が読みとれて興味深い。同時期の日本国内の図書館関係誌にはないユニークな誌面作りをしており、今日でも館報の在り方考える好個の資料である。

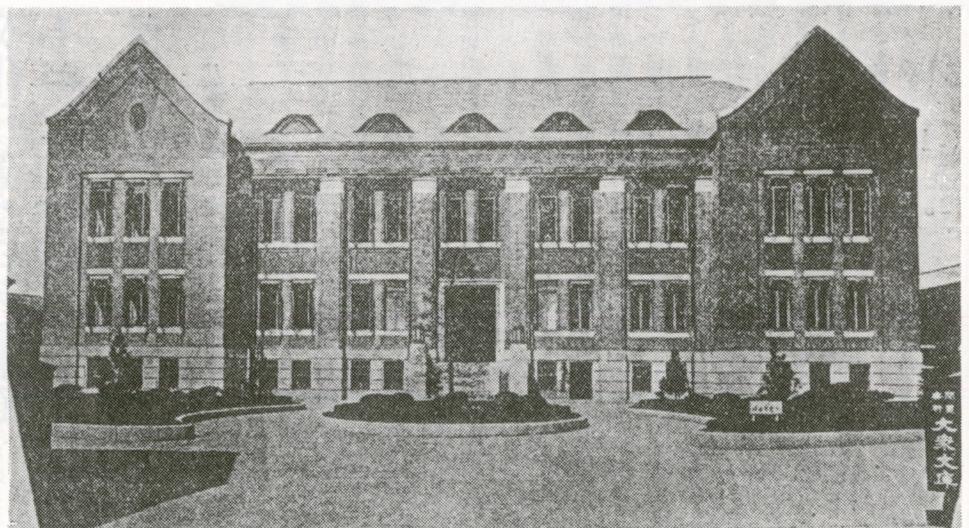
復刻版の解題は旧総督府図書館員であった藤田豊氏にお願いしたが、内部の者でなければわからない話も多く、これ自体が一つの資料となっている。

このように本誌は植民地図書館・文化資料としてだけでなく日本の戦前の図書館資料としても第一級のものであり、広く活用されんことを期待したい。



植民地期朝鮮の社会・文化の動向を知る。

不可欠の資料。韓国近代図書館史の基本資料。



朝鮮総督府図書館

韓国近代図書館史研究 に不可欠の資料

朴 熙永 (韓国図書館協会諮問委員)

三〇年前、私は『韓国図書館史研究』と『国立中央図書館史』を著したことがあります。その時、もしこの『文獻報國』が発行されていなかったら、これ等の研究をするのに大変苦労したであろうと思います。この『文獻報國』があったればこそ、これ等の研究を成しえることが出来たわけ、この貴重な資料を萩山館長が残して下さったことをつくづく有り難く思いました。

総督府図書館の萩山秀雄館長は、この図書館が韓国に於いて唯一の中央図書館だと常に謂われ、この図書館の蔵書構成は勿論のこと、韓国に設立されていた全図書館に対しても、この様な考えを前提として経営に当ってこられたので、韓国図書館の過去を知る上で不可欠な情報を提供してくれる参考資料の一つが、この総督府図書館の館報である『文獻報國』です。

この資料を利用する人によってその価値は異なりますが、現在まで韓国の新図書館が歩んで来た足跡と変遷した影を辿る上で、この『文獻報國』が基本的資料であることを経験した一人として、今回の復刻刊行を喜び推薦する次第です。

『文獻報國』の図書館史上の意義

宇治郷毅 (国立国会図書館・植民地図書館史研究者)

朝鮮総督府図書館の館報『文獻報國』が朝鮮の図書館史上に有する歴史的意義は次の点にあると思われる。

第一は、本誌が植民地期朝鮮の数少ない館報の一つであり、昭和十年代という重要な時期をカバーしている点。第二は、朝鮮の中央図書館という朝鮮図書館界は最大の影響力をもつ図書館の館報であった点。第三は、図書館学、書誌学上の多くの秀れた論文、批評、研究が掲載されている点。第四は、朝鮮図書館界の状況・問題を知り得るニュースが豊富な点。第五は、館の閲覧報告、諸行事、人事、日誌、館員の研究発表などが詳細・豊富に掲載されており、館の動態と思想的流れを一目瞭然に知り得る点。第六は、目録、書誌類が充実している点。「新着図書分類目録」(中央図書館の義務として新収の蔵書を報知したもの)、「鮮内発売禁止図書目録」(治安、風俗関係の発売・発行禁止本の目録で、朝鮮における出版統制の実態を知り得る資料)、「警務局納本目録」(朝鮮総督府警務局に納品された朝鮮内刊行物の目録で、当時の朝鮮の刊行物を知る貴重な資料)、「朝満関係重要雑誌記事目録」(類似目録が少ないので貴重な目録)等がそれである。

本誌は、植民地下の図書館界がいかに戦争体制に組み込まれ、いかに教化機関化していくかを具体的に知り得る貴重な資料であり、当時の図書館

運動の諸相、広くは文化運動の一面を明らかにし得る第一級の資料と言えよう。

植民地下朝鮮の皇民化文化政策を知る上で不可欠の資料

河田いこひ (日本植民地図書館史研究者)

日本の植民地経営には、皇民化という特異な政策があったが、この政策をおしすすめるにあたり図書館が大きな役割をはたしたことは、あまり知られていない。それは、戦後の図書館界が、旧植民地の図書館やその機関誌類を、なかったかのように扱ってきたからである。朝鮮総督府図書館については、一九七三年に韓国国立中央図書館が、館史の中にその活動をくわしく記して出版したが、日本の図書館界はこれを受けとめなかった。

朝鮮支配二五年を記念して発刊された『文獻報國』は、その誌名からもうかがえるように単なる図書館業界誌ではない。細かな記事のひとつひとつに具体的な植民地政策の反映がみとれる。たとえば、全館員が名を連ねた年頭のあいさつのページで、一九四〇年には七一人中朝鮮名が四六人だったが、一九四一年には七八人中七二人までが日本名になっている。『文獻報國』は侵略と文化を考える上で欠かせない原資料として、復刻が待たれていたものである。



館内日誌

[1] 月

- 1日(土) 午前10時より新年拜賀式舉行。定期休館。
- 2日(日) 開館開始。
- 3日(月) 元始祭。
- 4日(火) 御用始式舉行。全館員朝鮮神宮京城神社參拜臨時進展會開催。館長東京及京都へ出張の爲午後9時京城驛を出發す。
- 5日(水) 新年宴會。
- 6日(木) 本館採用内定の圖書館講習所卒業生笠木清吉本日来城登館す。
- 8日(土) 大昭奉戴日。昭書奉讀式舉行。全館員護國神社參拜。定例進展會開催。
- 9日(月) 月曜朝禮を下記の通り實施。
皇宮典範と帝國憲法 司書 高橋勝次郎
讀書會開催。本日附下記發令ありたり。

朝鮮門	附錄	東京	昭和
北を行く	金銀組合經營論	山根 謙	昭和〇〇
經濟資料	第一九二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第一九九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二〇九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二一九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二二九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二三九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二四九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二五九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二六九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二七九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二八九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九一卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九二卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九三卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九四卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九五卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九六卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九七卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九八卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第二九九卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇
經濟資料	第三〇〇卷	東亞經濟調查局	昭和〇〇

鮮滿關係重要雜誌記事目錄

[昭和14年9月]

朝鮮に於ける國民精神總動員運動について	堂本敏雄	朝鮮通信	256
扶餘神宮と御祭神	中村榮孝	文叢の朝鮮	170
時局下京城府民の讀書傾向	王井徳重	朝鮮及滿洲	383
半島婦人の心構へに就て	瀧 勳	青 色 紙	6
北滿農村の動態的考察	石田 精一	滿鐵調査月報	19-10
朝鮮人出遷羅進出論	文章 郁	朝 光	5-10

昭和十四年度總督府豫算に就て	水田直昌	朝鮮財務	17-10
○ 語學・文學・歴史・地理			
言語上으로는鮮滿蒙の關係	金澤庄三郎	正 音	31
文化表現の國語的趨勢	金 文 梓	青 色 紙	6
李孝石論	李 孝 石	朝 光	1
朝鮮アジヤ半島民族	阿部一正	朝鮮の教育研究	134
滿洲國の史考	酒 田 茂	朝鮮及滿洲	383

警務局納本目錄

[昭和16年11月中]

瀛洲文獻通覽	柳 化 樞	戴寧李氏族譜	李 鉉 茂	朝鮮燈火管制規則	大 上 哲 夫
衛生統計	昭和15年度	茂くろく	松浦 晉治	日本精神と基督教	松浦 文雄
西鮮時代と鎮南浦港	平安南道衛生課	酒類配給機構の整備に就て	本府財務局稅務課	農事組合の經營と其指導	慶尙南道農政課
朝鮮農村の動態的考察	石田 精一	少年行刑統計	朝鮮總督府	農地公定價格表	朝鮮行政學會
朝鮮人出遷羅進出論	文章 郁	生活哲學概説	小見門 卯七	草莽の綴	星 山 平
朝鮮の教育研究	阿部一正	全羅南道水産試驗場報告	全羅南道水産試驗場	半島同胞の赤誠	京城大和塾
滿洲國の史考	酒田茂			平安北道職員錄	平安北道
朝鮮及滿洲	383			國語講座	朝鮮語學會



ウィリアムソン「朝鮮」(完)

小倉親雄譯

は字母順に排列し・有らゆる點で日本語に於ける彼等自身の言語を有してゐる。併し目下のところ諸學校に於ては、漢字並にが教授され、立身出世を冀ふ者は凡て支通曉しなければならぬのである。並びに此の地の人々は朝鮮には礦物が豊富と言ふ事を齊しく言明してゐる。即ち石の地方に於て普通一般に使用せられ、又製鐵せられてゐる。銀礦及び方鉛礦は

鮮内發禁圖書雜誌目錄

(昭和十年八月調査分)

本目錄は治安妨害、風俗擾亂の理由により發禁、發行禁止並に差押の處分を受けたもの圖書及雜誌にして、中には一部分削除の上頒布差支へなむるものも含んで居る。圖書取扱關係者の參考とする。

- 一、労働者救本經濟學ABC上巻
- 昭和十年七月七日附大府市 ナニハ書房發行
- 但し一三八頁及び一五二頁削除ノ上頒布差支メテ差支
- ナシ
- 一、華僑(半月刊)五月十六日附第六六六九期合刊南京發行(支那支)
- 一、政治及財政 昭和十年七月一日第七卷第七號
- 東京市發行
- 一、第一回全作家大會報告(文學評論編輯部代表演説)
- 遼順三譯
- 昭和九年十一月十四日附東京市 ナカラ社發行
- 一、時間 昭和十年八月一日附第四年第三十三號東京市發行

第116回公開館員研究發表 (昭和17年1月14日 於本館中央閱覽室)

歐人の朝鮮語研究

編 託 小 倉 親 雄 譯

E. Griffis 著 "Korea; The Hermit Nation, London, 1882." の附録 "Study by Euro-ものである。研究發表として「歐人の朝鮮研究」と題し、廣汎なる觀點より概論を試此の補研究に於ては蓋し參考すべきもの不尠と信じ、茲には本調査を以て代ふる事とし

語は謂はゞ七つの封印ある獸 著作には四千字餘りが解説せられてゐる。 一八三六年には始めて佛蘭西宣教師が朝鮮に

介紹

本館貴重圖書(二)

藏乘法數 (元)釋可遂重集

釋靈通校 應永十七年

一冊 古一七五十四四

五山版、和綴快入、堅八寸八分。横五寸三分四角邊、堅六寸九分、横四寸四分。版心に法數とあり、紙數五十五丁、元統甲戌佛生生日合明初教退隱寂知子可遂序、元統甲戌晦日合衆余關及び至正庚子春古果山人永知の後序ありて尙ほ卷末に左記刊記あり。

比丘靈通修禪之暇古教照心書思法義有未解了而扼吾口者偶獲遂師藏乘法數若若義談然在目乃欲流通是書與天下學者共之周州大先道雄居士欣然施財命工以壽干持使覽者乃知釋不

社會統制

李 在 郁 (五日)

吾人が理想的生活を営むには、各個人をして其の社會生活に適應せしむる權にその行動をある程度まで掣制することが必要である。このことは社會的暗示、輿論、習慣、制度等の力により圓滑に行はれるのである。

北支問題と排日教育

山中信義 (十三日)

北支問題の主因は支那國民の抗日侮日の意識であり、其の起因は彼等が意識的に授けられた排日教育の結果であつて恐るべき根柢をなすに居る。實に初等教育の影響は國民性を動かす重大問題である。

集團力

姜 汝 會 (十四日)

一人の力は微々たるものではあるが決して侮るべきではない。一滴の水が集つて大流をなす様に勢力ではあるが一致團結する時には誠に偉大なる力を發揮する。

戰爭と文化

五井 謙 重 (十九日)

千戈天下に奔走して腥風刺る處に吹きすまば間は、文

七月の自然

向 井 謙 三 (一日)

雨季のこの日珍らしくも空晴れ自然久し振りの陽氣に包まれた。綠濃く、

欲先言者

堀 謙

縁路公幹而履、典冠者見君之乘也、故一覺醒而說、問左右則典冠、君因疑罪典、惡乘也、以爲使官之者甚於乘也。遽乎、情辭が激健な身體、

萬邦協和

孫 謙

現代の萬邦と申すのは昔、支那一國と高邦でなくして、即ち世界列國を指すのである。是が語り世界列國の平和を強調する我

身心の相

孫 謙

戸外運動の内習通の國民の體格向上に關し、體格的が激健な身體、

運動の効

堀 謙

運動のこの日珍らしくも空晴れ自然久し振りの陽氣に包まれた。綠濃く、

本誌の特色と主な内容

1 朝鮮研究の手引

●「新着増加図書分類目録」(和書の新書・古書、洋書、文庫本と朝鮮門として朝鮮、満州、蒙古、シベリアに関する図書と朝鮮語図書)や「本館備付雑誌新聞目録」は総督府図書館所蔵の全容がわかる基本資料。現韓国中央図書館に継承された旧総督府所蔵本の手引書としても活用できる。

●「鮮満関係重要雑誌記事目録」昭和10年8月から19年10月まで毎月、雑誌(総督府図書館備付)から朝鮮・中国(満洲)・蒙古に関する各分野(哲学・宗教・教育・社会・法律・政治・経済・語学・文学・歴史・地理・理学・医学・工学・軍事・産業・芸術・総記・雑纂)の重要記事を掲載。記事総件数7220、所収の雑誌の数は、『文獻報國』、『朝鮮』、『朝鮮及満洲』など日本語・朝鮮語のもの合わせて約370誌にのぼり、他に類を見ない貴重な資料。

2 出版・思想関係資料

●「鮮内発禁図書雑誌」本目録は治安防害や公序良俗に反する理由により発行、発売禁止及び差押の処分を受けた図書・雑誌を昭和10年8月分から13年1月分まで毎月掲載したもので、朝鮮における出版取締りや思想統制の

実情を知る貴重な資料。

●「警務局納本目録」昭和12年1月から19年10月まで朝鮮で公に出版された図書(この間の発行点数6026)の全リストを毎月に掲載したもので、朝鮮における出版史・歴史研究には不可欠の資料。

3 朝鮮関係書誌・文献資料

●「本館特別図書紹介」31回にわたり紹介し、合わせて原本の写真を付している。紹介書・資料の一例を上げると、蔵乘法数/華夷通商考/仏租三経注/入学図説/燕行図幅/韓仏字典/翻訳小学第十卷/太平広記詳節他

●「公開館員研究発表」館員が書誌・版本等に関する研究発表をしたものを掲載したもので(全138回、昭和12年5月~19年9月)、今日においてもその資料的価値は高い。主なものを上げると、第7回、石上宅嗣及び其の父祖の文藻について/第71回、李朝実録の成立に就て/第73回、玉龍寺先覚国師道説の一考察/第80回、大蔵経目録とその分類/第85回、奎章閣開設の縁由に就て(上・下)/第87回、オッペルトの「禁断の国朝鮮」(上・下)

/第89回、南別宮考(上・下)/第99回、朝鮮の典籍について(一~四)/第120回、李朝西南党争の検討(上・下)/第121回、三臣新修東国史略に就て(上・下)/第122回、松下見林と朝鮮文献(上・中・下)/第134回、伽耶山海印寺経板

の典籍について(一~四)/第120回、李朝西南党争の検討(上・下)/第121回、三臣新修東国史略に就て(上・下)/第122回、松下見林と朝鮮文献(上・中・下)/第134回、伽耶山海印寺経板

について(上・下)

●「海外欄」「朝鮮に於ける仏教の影響」、「朝鮮関係欧米文献について」等、朝鮮を中心にした論文28(英文、独文、仏文、中文)を、昭和14年1月より17年12月まで48回にわたり諸外国及び在朝外国人に紹介。

・展覧会目録
・朝鮮古書籍公定販売価格一覧表
・新刊書評

4 植民地図書館の役割と植民地図書館人の言動

●図書館の日常業務及植民地図書館人(日本・朝鮮人)の動向と発言資料。館内日誌、館勢月報、館員消息、毎朝行事と講話抄、月曜訓練、常識講座、向上板、奎宿抄、実験感話、良書撰択会、会計報告、他。国内の同類誌にないユニークな記事満載。

●「模範週間名士講演」昭和12年2月より19年10月まで全81回、毎回政治、経済、教育、軍人各分野で朝鮮を中心とする著名人をよんで講演を行った。時局の推移にそった図書館の役割と認識が読みとれる。「巻頭言」も同様の資料。

●「図書館大会号」(第2号)は第29回全国図書館大会(朝鮮)の記録。とくに当時の日本図書館人の植民地認識・朝鮮認識を知る貴重な資料。

朝鮮史・朝鮮書誌研究に貴重な文献!

図書館必備の図書館雑誌の最高峰！

日本植民地文化運動資料⑤

文 獻 報 國

刊行概要

全一一二巻 別冊一

体裁—B5判／上製クロス装／函入 頁数—総5,500頁
 挿定価—247,200円(配本価格は左記参照)
 ISBN4-89774-008-3 C3000 P247200E

第1回配本—平成5年12月刊 配本価格82,400円

- 第1巻 第1—5号 昭和10年10月—昭和11年10月
- 第2巻 第6—14号 昭和11年11月—昭和12年8月
- 第3巻 第15—22号 昭和12年9月—昭和13年4月
- 第4巻 第23—30号 昭和13年5月—昭和13年12月

第2回配本—平成6年3月刊 配本価格82,400円

- 第5巻 第31—39号 昭和14年1月—昭和14年9月
- 第6巻 第40—48号 昭和14年10月—昭和15年6月
- 第7巻 第49—57号 昭和15年7月—昭和16年3月
- 第8巻 第58—65号 昭和16年4月—昭和16年11月

第3回配本—平成6年6月刊 配本価格82,400円

- 第9巻 第66—74号 昭和16年12月—昭和17年8月
 - 第10巻 第75—83号 昭和17年9月—昭和18年5月
 - 第11巻 第84—92号 昭和18年6月—昭和19年2月
 - 第12巻 第93—102号 昭和19年3月—昭和19年12月
- 別冊 解題(藤田豊)・総目次・索引

予約募集

限定出版につきお早めにお申込み下さい。

本資料集の定期購読受付中！

日本植民地文化運動資料

戦前の植民地文化を知る手がかりとなる基礎資料の発掘
 昭和激動期の文化状況を伝える総合書評誌！

1 書 香

全5巻・別冊1／滿鉄大連図書館編
 大正14年4月—昭和19年12月 全10冊
 挿定価144,200円

本誌の内容は、大連を含め各滿鉄図書館の活動の記録、中国新聞図書案内、滿洲の出版界の動向、北アジア大陸の諸文化、関東軍の動向に関連した情報、本邦書籍の書評、各種の文獻目録等多岐にわたる。滿鉄図書館史はもとより、滿洲史、中国史、軍閥係史、アジア史研究にとって資料の宝庫。

2 北 窗

全5巻・別冊1／滿鉄哈爾濱図書館編
 昭和14年10月—昭和19年3月 全26冊
 挿定価82,400円

滿洲学芸史研究上、重要な意味を持つ本誌は、滿鉄傘下の図書館の枠を超え、在滿邦人の知的要求に応えた高級でモダンな綜合文化雑誌であった。その内容は歴史・民俗・芸術・教育・出版・書評など、滿洲における文化事業の全般に及ぶ。

3 收書月報

全10巻・別冊1／滿鉄奉天図書館編
 昭和11年10月—昭和18年9月 全91冊
 挿定価105,800円(6月刊)

本誌の特色と内容は、何よりも館長衛藤利夫の個性と情熱によって収集された密度の濃い蔵書群を反映している点にある。その密度の濃さはとくに、滿蒙・シベリア等辺境研究図書に表われている。質量ともに充実したこれらの資料を駆使した多数の研究論文や書籍・雑誌解題や紹介は、東北アジア史研究に不可欠。

4 滿洲讀書新報

全5巻・別冊1／滿洲讀書同好会編
 昭和11年1月—昭和20年4月 全95冊
 挿定価41,200円

本誌は滿洲における読書文化の発展に貢献することを使命とし、滿洲の文化人に発言・寄稿の場を広く提供し、その誌面は滿洲の出版界・読書界・図書館界の動向はもとより、隨筆・書評、書誌、讀書論、古本趣味、図書紹介等極めて多彩で、興味はつきない。

●本資料集は今後も継続して刊行します。

●お取り扱い